

南アジア研究から見た地域研究の可能性

外川昌彦

私は、南アジア社会をフィールドとして研究していますが、特にインドのヒンドゥー社会とバングラデシュのムスリム社会との比較を行っています。「文明の衝突」とも言われるヒンドゥー教とイスラームとの比較研究、あるいはテロや核開発競争の絶えない南アジアの国々の比較研究を通して、地域の問題を考えようとしています。

それだけに私は、地域研究という方法は、とても可能性があるものと思っています。

たとえば、政治学者ハンティントンの提唱で知られる「文明の衝突」も、単純にイスラーム文明とキリスト教文明、あるいはイスラーム文明とヒンドゥー教文明とが対立しているといった見方に対しては、地域研究者の間で様々な疑問が指摘されています。

ここでは、このような南アジア研究に見られる多様な課題を通して、地域研究の可能性についてお話してみたいと思います。

地域研究者ならではの視点

今年の11月にインドのムンバイでテロ事件が起きましたが、200人近くもの犠牲者が出て、その中には日本人も含まれていたことで、大きく報道されました。

ところで、日本のメディアの多くは、これを当初はインド・パキスタンで繰り返されるヒンドゥー教とイスラームの宗教紛争の延長としてとらえ、報道していました。しかし、今回のテロの標的がアメリカ人、イギリス人、そしてユダヤ人を狙ったものであること。しかも、その舞台がインドの経済躍進を象徴するムンバイであったことなどから、従来の宗教対立とは異なり、むしろ国際的なテロ組織と連動した動きとして捉えるべきことが、地域研究者から指摘されるようになりました。それ以来、これは単なるインド国内の

宗教問題ではなく、むしろ 9/11 以降のグローバルなテロとの戦いの中で捉えるべきだ、という見方が有力となりました。

実際、その後、インドとパキスタンは、テロの犯人をめぐって互いに非難し合うことで両国の緊張関係が高まりましたが、その結果として利益を得るのは、まさにパキスタンの国内で反政府活動を行っているテロ組織ということになります。このことを見ても、パキスタンがイスラームの国で、そのため異質な文明といつも対立を繰り返しているといった見方が、一面的なものに過ぎないことが良く分かります。

長期にわたって地域社会に根を下ろすことで見えてくる地域研究者ならではの視点が、このような問題を理解する上でも、生かされるのではないかと思っています。

女性と地域社会

バングラデシュは、最近ではグラミン銀行のムハマト・ユヌスさんがノーベル平和賞を受賞されたことで有名になりました。ユヌスさんは、マイクロクレジットと呼ばれる女性への小口の融資を行い、女性の自立の能力を引き出して、それを地域開発に結びつけたことで高く評価されました。去年は、そのユヌスさんが来日され、広島大学でも講演を行いました。

ところで、ノーベル賞の受賞でユヌスさんの活動が広く知られるようになったことは良いのですが、それにも関わらずバングラデシュの地域研究者の間では、マイクロクレジットへの評価は限定的なものだとされ、様々な問題点も指摘されています。

たとえば、女性が鶏を飼育して卵を売ったり、手工芸品を売ったり出来るのは、消費者としての中間層の購買力が高まったことが背景に挙げられます。つまり、社会全体が豊かにならなければ、マイクロクレジットだけが普及してもバランスの取れた地域開発には繋がらないことが指摘されています。また、農村の女性が融資を受けて新しいビジネスに熱中するあまり、いつも家を空けて働くようになってしまい、家庭を省みなくなったという意見が現地の人々から寄せられるようになっています。過剰な融資から、女性たちが日々の返済に追われるような状況も生まれていると、現地の新聞などでも報道さ

れることもあります。

日本でも、専業主婦の比率が半分以上となり、共働き世帯の子育てが問題となっていますが、バングラデシュでも女性の就労機会が増えることで、逆に新たな社会問題が生まれていることが分かります。もちろん、だからと言ってマイクロクレジットの意義が否定される訳ではないのですが、同時にマイクロクレジットさえ上手くいけばバングラデシュの諸々の問題が一挙に解決するといった、万能の処方箋ではないことも間違いなideでしょう。

特にバングラデシュでは、イスラーム票を基盤とする保守的な宗教政党が、マイクロクレジットは伝統的な女性の規範を損ない、女性たちをお金の亡者にしてしまうものだとし、繰り返し批判的な意見を表明してきました。

バングラデシュは、その歴史的起源であるパキスタン時代から継続して、イスラームに基づく国民統合の政策を進めてきました。天然資源も工業力も十分になく、人口だけは過剰な発展途上国のひとつとして、イスラームを通じた国民統合は、バングラデシュでは様々な批判を受けながらも、誰もが否定の出来ない重要な政策とみなされています。

すると、イスラームの文化を大切にしようという政治家の言葉と、女性に働く機会を与えようとするユヌスさんたちの活動は、一見すると伝統と近代の対立のようにも見えるのですが、しかし実際にはどちらも、現代のバングラデシュの経済発展をめざし、豊かな社会を作ろうとする人々の願望に根ざしている点では、共通した課題であることが分かります。

南アジアと地域研究

バングラデシュの人口は、日本の人口を抜いて1億5千万人と推計されています。バングラデシュの人口の約9割はムスリムですが、なお1割はヒンドゥー教徒で、人口規模は1千万人を超えています。しかし、今お話したイスラーム・ナショナリズムの政策によって、バングラデシュのヒンドゥー教徒は、圧倒的なマジョリティであるムスリム社会の中で、マイノリティとしての様々な困難な状況におかれています。

他方のインドでは、全人口が11億7千万人と見積もられるなかで、ムスリムの平均人口は約13%で、それでも人口規模では1億5千万人を超えてい

ます。

インドは、パキスタンとの対比から、ヒンドゥー教の国と見なされることが多いのですが、実際にはインドネシアに次いで世界でも人口の多い、ムスリム大国であることが分かります。そのムスリムの多くは、分離独立の際にもインドに留まる事を選んだ人々ですが、約9億人という圧倒的な多数を占めるヒンドゥー教徒の中で、彼らは宗教的マイノリティとしての様々な問題にさらされています。

それはちょうど、バングラデシュに留まった約1割のヒンドゥー教徒がおかれている状況と、よく似ていることが分かります。

実際、インドで多数派のヒンドゥー教徒が暴動を起こしてモスクが破壊された時には、すぐにバングラデシュにその暴動が飛び火し、多数派のムスリムによるヒンドゥー教徒への暴動が発生しました。

すなわち、マイノリティ国民の社会的基盤の弱さという点では、バングラデシュのヒンドゥー教徒は、同じ国のベンガル人同士よりも、むしろ隣のインドにおけるムスリム社会と、共通した問題を抱えていることが分かります。

地域研究の可能性

このような南アジア地域の複合的な問題を理解するためには、そのため単なるインドやバングラデシュといった国民国家の枠組みからの分析でも、またヒンドゥー教やイスラームといった個別の宗教の分析でも、十分ではないことが分かります。

むしろ、地域社会を捉えてゆく立体的で、総合的な視点が大切なことが分かります。そのため私は、地域研究という方法とは、このような地域社会を複合的な視点で理解してゆくための、とても大きな可能性を与えてくれるものと考えています。

そして、地域社会が複合的な要素を持ち、多元的な関係性から構成されているという観点は、同時にグローバル化と言われる時代の中で、翻ってみれば私たちが暮らしている日本もまた孤立した存在ではなく、このようなアジアの人々との様々な結びつきを通して成り立っているのだということを、教えてくれるのではないかと考えています。

グローバル化する世界経済の中で、遠い異国の土地と思われたインドで起きたテロ事件で、日本人も巻き込まれ犠牲になってしまったという出来事は、このような複雑な結びつきを見せる現代の世界を、とても不幸な形で象徴する事件となっていたのではないかと考えているのです。